

# アンドラゴジーの視点からみた 成人のピアノ教育における学習指導に関する研究

大人のピアノ教室指導者・三上香子  
大阪教育大学・堀薫夫

本稿は、成人のピアノ学習者へのピアノ指導に対して、成人の特性を活かした学習支援論である、ノールズのアンドラゴジー（＝成人教育学）論の適用の可能性を検討した研究である。アンドラゴジーの5つの柱と7つの学習プロセス要素をもとに質問項目を作成し、自宅ピアノ指導者8名に対する半構造化インタビュー調査を行った。その結果、ピアノ指導者の多くはまだ成人特性を念頭においた指導をしていないものの、雰囲気づくり・自己決定性・学習へのレディネス・方向づけなどでは、アンドラゴジー論の柱にそった実践への意識が部分的にうかがわれた。しかし、学習者の経験の活用と学習への動機づけの2つには、まだあまり意識が向けられていなかった。したがってとくにこの2点で、指導者の意識を変革できるならば、アンドラゴジー論を援用した成人へのピアノ指導に展望が開けるのではないかという結論に達した。

キーワード：アンドラゴジー／マルカム・ノールズ／成人のピアノ教育

## はじめに

1990年代以降、少子化や習い事の多様性などから、子どものピアノ学習者が減少する一方で、生涯学習としてピアノ学習を希望する成人が増加してきている<sup>1)</sup>。そこで大手楽器製作会社は、成人を対象とした音楽教育事業の拡大を図った<sup>2)</sup>、楽器店を介して展開されているピアノ教育の場では、その主たる対象は子どもであって、成人がピアノ学習を積極的に行っていく環境はまだ十分に確保されているとはいえない。

他方これらと同様に、日本のピアノ教育を支えてきたのは、指導者宅で行われるピアノ個人レッスン教室であった。たしかに近年、自宅ピアノ教室においても、成人のピアノ学習者は一定数存在する。しかし、自宅ピアノ教室でのピアノ指導は、指導者自身が長年にわたって受けてきた学習経験をもとに、それを子どもに対するのと同様に成人にも伝承してきたとも考えられる。つまり、近年増加傾向にある、一般的に「趣味のピアノ学習

者」とよばれる成人ピアノ学習者に対しては、学習者の成人としての特性やニーズにそった指導がなされていないのではないかということである。

そこで筆者（三上）はまず、自分自身が運営するピアノ教室にかかわっている数名の指導者に対して、簡単な予備的調査を実施した<sup>3)</sup>。その結果、成人ピアノ学習者は生活上の場面に則した学習を求めていること、多くの指導者の指導の中心はあくまで子どもだと考えられていることが示された。なかには成人がピアノ教育の対象になるとは考えていないと指摘する者も存在した。この予備調査の結果、成人のピアノ学習者とピアノ指導者との間に大きな意識のずれがあるのではないかと推測された。筆者は、このような意識の差を狭め、成人のピアノ学習者に適合的な指導を進めていくためには、指導者側が、子どもと成人の学習者としての差異に気づき、そうした特性をふまえた指導法を行うことが必要ではないかと考

えるにいたった。

そこで本稿では、成人の特性を活かした学習援助論であるマルカム・ノールズ (Knowles, M. S.) のアンドラゴジー (andragogy; 成人教育学) 論を、成人のピアノ教育に適用できるのではないかという仮説を立て、自宅ピアノ指導者を対象とした調査のもとに、アンドラゴジー論を成人へのピアノ指導に適用することの妥当性を検討することにした。

## 1. マルカム・ノールズのアンドラゴジー論

### (1) ペダゴジーとアンドラゴジー

マルカム・ノールズは、成人の特性を活かした学習支援のあり方を研究したアメリカの成人教育学者である。彼は、子どもを対象とした教育学がペダゴジー (pedagogy) と呼ばれるのに対して、成人には子どもとは異なる学習者特性があるという前提のもとに、成人に対する教育をアンドラゴジーと名づけ、成人教育学を体系化しようとした<sup>4)</sup>。アンドラゴジーとは、ギリシャ語の aner (「成人」を意味する) と agogus (「指導」を意味する) が合成された造語であり、「成人を援助する技術 (art) と科学 (science)」だと定義されている<sup>5)</sup>。

もっともアンドラゴジーという語は、ノールズの造語ではなく、過去にエデュアード・リンデマン (Lindeman, E. C.) がアメリカの文献のなかで用いていたこと<sup>6)</sup>や、そのルーツがヨーロッパにあること<sup>7)</sup>などには留意する必要がある。ただアメリカの成人教育は伝統的に、個々の学習者や地域のニーズを重視したり、職業教育を軸とするプラグマティックで実践的な学習を重視したりする伝統がある<sup>8)</sup>。それゆえ訓練や技能習得が重要となるピアノ教育においては、アメリカの成人教育学のほうがより適合的だと考えられる。

### (2) ノールズのアンドラゴジー論の5つの柱

ノールズは、リンデマンの成人教育論やデューイ (Dewey, J.) の経験主義教育学、ロジャーズ (Rogers, C. R.) らの人間性心理学などの論のもとに、自身のアンドラゴジー論における5つの柱を打ち立てた<sup>9)</sup>。彼のいう5つの柱は以下のとおり

である<sup>10)</sup>。

#### ① 学習者の自己概念の変化

人間は成熟するにつれて、その自己概念が依存的なものから、自己決定的 (self-directing) なものに変化する。成人学習の支援者は、この自発的・主体的であろうとする成人の心理的要求に応じていかねばならない。ノールズのアンドラゴジー論のなかで最も重要であり、かつ残り4つの柱の基盤となるものが、この学習者の自己概念の変化である。だが、すべての成人がつねに自己主導的に学習するとはかぎらない。生活領域では自発的であったとしても、ひとたび学生の立場になった途端、教師に対して依存的になることも多い。しかし、こうした受動的な学習は、学習者の内面の深部にある自発的でありたいとする心理的ニーズと齟齬をきたす。その結果、成人学習者はこうした子どものような学習態勢に対して、自己の深いニーズが発揮できないもどかしさを自覚し、場合によっては学習そのものを辞めてしまうこともある。こうした、一見矛盾するような学習心理を有しているのが成人学習者なのである。

#### ② 学習者の経験の役割

人間は成長するにつれて多くの経験をもつが、これは、学習のための貴重な資源となる。また、成人は子どもにくらべ、より多くの多様な経験をもっている。これらの経験が活かされない状況や、経験そのものが否定された場合、成人は自分自身のそれまでの生き方が否定されたように感じる。それゆえ成人教育においては、こうした成人の経験を学習資源として活用・開発する教育技法が求められる。

#### ③ 学習へのレディネス

学習へのレディネスとは、何かを学習する際に必要となる準備状態をさす。子どもの学習へのレディネスが生物的発達課題や親・教師からのプレッシャーによって芽生えることが多いのに対し、成人の学習へのレディネスは、社会的な発達課題や社会的役割を遂行しようとするところから生じることが多い。

#### ④ 学習への方向づけ

学習へのレディネスが、現在成人のおかれてい

る社会的立場から生じることが多いゆえ、「そのうちに役立つだろう」といった学習は成人には向いていない。子どもの学習への方向づけが将来の成人生活に向けた教科中心的なものが多いのに対し、成人の学習への方向づけはより即時的で、問題解決・課題達成的なものが多いとさえいえる。

### ⑤ 学習への動機づけ

子どもの学習への動機づけでは学校での成績や評価など外在的なものが多いのに対し、成人の学習への動機づけでは、内在的なもの（自尊心、自己実現など）がより重要となる。

表1 ペダゴジーとアンドラゴジーの考え方の対比

	ペダゴジー	アンドラゴジー
学習者の概念	依存的なパーソナリティ	自己決定性の増大
学習者の経験の役割	学習資源としてあまり重視されず、教師や教科書執筆者の経験が重視される	学習への貴重な資源となる
学習へのレディネス	生物的発達段階と社会的プレッシャーによる	生活上の課題や問題から芽生える
学習への方向づけ	教科中心的、延期された応用	課題・問題中心的、応用の即時性
動機づけ	外部からの賞罰による	内在的な誘因や好奇心による

表1は、ノールズの5つの考え方を柱に、ペダゴジー・モデルとアンドラゴジー・モデルを比較したものである<sup>11)</sup>。このようにノールズは、上記5つの柱をもとに、成人と子どもの学習支援のあり方を分類した。しかし彼は、成人に対するペダゴジー・モデルの適用を否定していたのではない。ノールズは、アンドラゴジーはある意味ペダゴジー・モデルをも包み込む体系であり、イデオロギーではないと述べたうえで、外国語の初心者の学習など、成人教育においてペダゴジーがふさわしい状況も存在すると述べている。以上の点を総じていえば、最終的にノールズは、成人学習の概念の根幹に自己決定性(self-directedness)が

あると主張しているといえる。

### (3) アンドラゴジーの学習プロセス・モデル

ノールズは、成人学習者による自己決定学習(self-directed learning)を促すために、成人学習のプロセスを提示した。ノールズの提示した7つの学習プロセス要素は、次のとおりである。

- ①教育的な雰囲気づくり。
- ②学習を(援助者と学習者が)共同で計画できるように準備すること。
- ③学習ニーズの診断。
- ④学習の目標や方向性の設定。
- ⑤学習プログラムの計画。
- ⑥学習活動の実施。
- ⑦学習プログラムの評価。

なかでもノールズは、雰囲気づくりに関する具体的な記述を多く残している<sup>12)</sup>。このことからノールズは、学習プロセスを支える要素として、雰囲気づくりを最も重要だととらえていることがわかる。またノールズは、雰囲気づくりにおいて、物理的な面以上により重要な面として、成人が受容され尊敬され、支持されているという心理的な面をあげており、またそのなかでもとくに大きな影響を及ぼすのが教師の行動であるとも指摘している。

## 2. 調査研究の背景

上述したノールズのアンドラゴジー論は、内外で看護教育や企業内教育、大学開放などの領域での実践を方向づける原理として評価され、それをふまえた実践的研究が多く出されてきた<sup>13)</sup>。しかしノールズの論をふまえた、成人ピアノ教育などの音楽教育の領域での実践的研究はそれほど多くはない。

成人のピアノ教育に関連する先行研究では、吉田秀文が音楽心理学者マーセル(Murser, J. L.)の「音楽的成長」の概念をもとに、個々人の自己実現をめざすことを目的として掲げている<sup>14)</sup>。丸林美千代はノールズのアンドラゴジー論を成人音楽教育の視点から分析したのち、成人音楽学習者の「自己決定学習」についてメジロー(Mezirow, J.)の「意味パースペクティブ論」を

もとに検討している<sup>15)</sup>。吉田や丸林のこれらの研究は、心理学や教育学の理論を成人の音楽学習にあてはめて考察するという興味深い研究ではあるが、どちらも成人学習者には成人の特性を生かした指導法が必要であるという方向性を示唆してはいるものの、具体的に指導者がどのような実践をすればよいのかまでは言及されていないといえる。

音楽指導者の専門性と具体的な指導法については、川村有美が克蘭トン(Cranton, P.)の成人教育論をもとに、指導者と成人学習者との対話の具体的な方向性に言及した<sup>16)</sup>。また石川裕司は、成人への音楽指導者に必要な姿勢として教育ファシリテーターをあげている<sup>17)</sup>。しかし、前者の調査協力者は一般的な自宅ピアノ指導者とは異なると考えられるし、後者は、一般的な音楽指導者を対象としているが音楽指導者であるため、本研究とは対象が異なる。

またこの方面の研究は、音楽専門雑誌や書籍でも多く刊行されている。例えば丸林実千代は『生涯音楽学習入門』のなかで、生涯音楽学習指導者は、学習者の自己実現に向かう援助をするべきだと述べたうえで、その方途としてボランティア活動をあげ、学習者のボランティア活動を援助する指導者の育成を今後の課題とした<sup>18)</sup>。しかしここでの指導者は、生涯学習施設での集団を対象にした音楽指導者であり、ピアノ個人レッスン指導者とは異なる。遠藤三郎は『生涯学習ピアノのすすめ』のなかで、「生涯学習は、“習う人中心”が原則である」と述べているものの、他方で「成人のピアノ学習者の最終目的は、脳の活性化をもとにピアノと一生付き合い、最終的には仮にピアノを弾かなくなっても音楽が生活を活性化させることだ」とも述べており、この点ではアンドラゴジーの視点とは方向がやや異なる<sup>19)</sup>。大村典子・大崎妙子『大人のピアノ：長続きのコツ』では成人を援助するかたちでのピアノ指導の具体例がわかりやすく記されているが、しかし理論的裏づけが乏しく、成人のピアノ学習者を長続きさせるハウツー本という印象を受ける<sup>20)</sup>。元吉ひろみの『シニア世代に教える最高のピアノレッスン法』は、成人教育学理論の裏づけをもち、健康科学の

領域と教材研究の上に成り立つピアノ指導者向けの書籍ではあるが、対象がシニア(60歳以上)の成人学習者に限定されており、成人全般に元吉の指導法が適用されるかは議論の要るところである<sup>21)</sup>。

これらの先行研究の渉猟から筆者は、現在行われている実践講座や先行研究・書籍等において、個人レッスンピアノ指導者を対象とした、ノールズのアンドラゴジー論をふまえたピアノ学習支援の実践はまだほとんど行われていないととらえた。

### 3. 調査の目的と方法

#### (1) 調査研究の目的と質問の柱

上記の動向診断をふまえ、本論では、以下の2つの調査をとおして、ノールズのアンドラゴジー論の成人向けピアノ指導への適用の妥当性を検討することとした。第一調査では、ノールズのアンドラゴジーの考え方がピアノ教育においてもあてはまるかどうかを確認するために、アンドラゴジーの5つの考え方の柱と7つの学習プロセス要素をもとに質問項目を作成し、これらに教室運営に関する質問を付け加えたうえで、個人レッスンピアノ指導者に向けた半構造化インタビュー調査を行った。具体的には、ノールズのアンドラゴジー論のなかの雰囲気づくりや自己決定性、学習者の経験の活用などを軸に、こうした点が実際のピアノ指導のなかで具体的にどう扱われているのかをたずね、それらを通じてピアノ指導者の意識を明らかにしようとした。

第二調査は、第一調査の結果をふまえ、ノールズのアンドラゴジーの考え方をどう思うのかをたずねることで、ピアノ指導者の成人指導のあり方への意識を確認することをねらいとした。現在成人を教えていない指導者や成人指導に消極的な指導者が、アンドラゴジーの考え方をどうとらえているのかを確かめたのである。

#### (2) 調査協力者

大阪府近郊に住む自宅ピアノ指導者8名を対象に、2013年3月24日から5月4日まで、および同年7月30日から8月8日までの2度に分け

て、個別インタビュー調査を行った。調査協力者の共通点は、全員が女性であること、自宅にて個別にピアノを指導していること、過去または現在において成人のピアノ指導経験があることの3点である。調査協力者のプロフィールは、表2と表3のとおりである。

なお、8名の調査協力者の所属が異なっている理由は、特定の楽器製作会社の音楽教育システムに偏った回答を防ぐためである。

表2 調査協力者のステイタス (2013年5月現在)

指導者	ステイタス
A	レストラン・ピアニスト
B	大人のピアノ教室主催
C	声楽家
D	X楽器認定講師
E	Y楽器認定講師
F	リサイタル・ピアニスト
G	Z楽器認定講師
H	無所属

表3 調査協力者の年齢・指導年数・生徒数

指導者	年齢	指導年数 (年)	成人の生徒 数 (人)
A	20代後半	2 (1)	0
B	30代後半	19 (4)	33
C	30代後半	18 (12)	6
D	50代後半	36 (16)	5
E	50代後半	36 (36)	6
F	40代前半	22 (10)	6
G	30代後半	10 (2)	1
H	40代前半	6 (2)	2

注) 指導年数の ( ) 内の数字は、成人への指導年数。

### (3) 調査方法

第1回目のインタビュー調査では、ノールズのアンドラゴジー・モデルの5つの考え方の要素 (学習者の概念、学習者の経験の役割、学習へのレディネス、学習への方向づけ、動機づけ) と7つのプロセス要素 (学習への雰囲気づくり、相互的計画のための構造の形成、学習ニーズの診断、

学習目標の設定、学習経験のデザイン、学習経験の実施と運営、学習成果の評価) をもとに、調査において訊くべき質問項目を作成し、さらに「成人を教えようと思うか」「これからのピアノ教室はどうあるべきだと思うか」など、ノールズのアンドラゴジー・モデルには含まれないピアノ教室運営に関する質問を追加し、実際の回答に応じてインタビューの柔軟性を加味した半構造化インタビュー調査を実施した<sup>22)</sup>。所要時間は1人約2時間程度で、調査協力者の属性関連の質問を除いた質問数は約25個である。表4は、このアンドラゴジー・プロセス要素ごとにみた、アンドラゴジーの考え方の柱と具体的質問項目との対応関係を示している。

表4 第一調査の質問項目

1. 学習の雰囲気づくり	
ノールズの考え方	
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室のレイアウトを中心に、指導者が学習者との対話の必要性を感じているか、またその理由。</li> <li>・具体的にどのような工夫がなされているか。</li> </ul>
2. 相互的学習計画	
ノールズの考え方	学習者の自己概念の変化、学習者の経験の役割、学習へのレディネス、学習への動機づけ
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験レッスンの際に気をつけていることは何か。</li> <li>・通常レッスンでも学習者に対して体験レッスンと同じ気配りをするか。</li> <li>・成人の学習者についてどう思うか。</li> </ul>
3. 学習ニーズの自己診断	
ノールズの考え方	学習者の自己概念の変化、学習への方向づけ、学習への動機づけ
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習者が自分の技術をこえた曲を弾きたいという場合はどうするのか。</li> <li>・子どもとのアレンジ法のちがいは何か。</li> <li>・どうしてもオリジナル曲を学びたい。という学習者はどうするのか。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもに対しても同じ対応をするのか。</li> <li>・なぜ成人に対して、子どもと同様に指導をしないのか、</li> </ul>
--	---

#### 4. 学習目標の設定

ノールズ の考え方	学習者の自己概念の変化、学習へのレディネス、学習への動機づけ
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人の学習者は、どのような目標をもってピアノを習いに来ると思うか。</li> <li>・趣味のピアノ学習者は上手になりたいと思っていないのか。</li> <li>・コンプレックスとは何か。</li> </ul>

#### 5. 学習への方向づけ

ノールズ の考え方	学習者の自己概念の変化、学習者の経験の役割、学習への方向づけ
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人と子どもは学習者としてちがうか。</li> <li>・具体的なちがいは何か。</li> <li>・基礎教材は成人の指導に必要だと思うか。</li> <li>・過去に鍵盤経験がある学習者のクセについてどのような対応をするか。</li> <li>・子どもに対しても同じ対応をするのか。</li> <li>・なぜ成人にはダメと言わないのか。</li> </ul>

#### 6. 学習経験の実施と運営

ノールズ の考え方	学習者の自己概念の変化、学習へのレディネス
質問項目	・成人と子どもの指導のどちらを好ましいと考えているか。

#### 7. 学習者の相互評価

ノールズ の考え方	学習者の自己概念の変化、学習者の経験の役割
質問項目	・学習者が弾きたいという曲をどのように選ぶか。

#### 8. 教室運営

ノールズ の考え方	
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからのピアノ教室はどうあるべきだと思うか。</li> <li>・成人を積極的に教えようと思うか。</li> <li>・趣味の成人ピアノ学習者を教えようと思うか。</li> </ul>

第2回目のインタビュー調査では、前回のインタビューで、成人を教えることに消極的な発言をした指導者に対して、その理由を明確にすること、および少子-高齢社会におけるピアノ教室の運営面を念頭におき、「成人を教えなければならなくなった場合、どのような教え方が必要だと思うか」の2点についてたずねた。さらにその後、本調査の目的であるアンドラゴジー論にそった成人のピアノ指導の具体例を提示し、「このような指導法についてどう思うか」とたずねた。なお、第1回目のインタビュー調査で成人の指導に積極的であると発言した指導者に対しては、成人の指導に消極的であると答えた協力者と同様に、その理由をさらにくわしくたずねるとともに、実際に行っている成人への指導法について具体的に述べてもらった。同様に、アンドラゴジー論にそった成人のピアノ指導の具体例を提示し、それに対する感想をたずねた。所要時間は1人約1時間で、質問数は6個であった。表5に第二調査の質問項目を示す。

表5 第二調査の質問項目

前回の調査結果の具体化	
質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人を教えることに消極的である理由を具体的に教えてください。</li> <li>・成人を教えなければならなくなった場合、どのように教えるか。</li> </ul>
アンドラゴジー論に関して	
例題	昔のピアノ指導では、指導者が指定した楽譜を生徒が自分で購入し用意することが当たり前でした。その考えからいうと、生徒が弾きたいという曲の楽譜を、先生が「こういうものがあります」と提案してくれる、または実際に手持ちの楽譜を貸してくれる今の先生の姿勢は、とても親切な態度だと思います。ただ、生徒からすれば押しつけになることがあります。「先生が勧めてくれた楽譜だから断れない」と思う生徒もいるのです。そのようにお考えになったことはありませんか。

質問項目	・学習者を援助するピアノ指導をどう思うか。
	・成人を子どもと同じように教えることをどう思うか。
<b>Bのみへの質問</b>	
質問項目	・成人を指導する喜びは何ですか。
	・アンドラゴジーの視点を生かすことをどう思うか。

#### 4. 調査結果

以下、第一調査と第二調査の結果を述べるが、記述にさいしては、質問項目は【 】、調査協力者の回答は「 」で表し区別をしている。

##### (1) 第一調査の結果

第一調査の結果から回答者の多くは、成人のピアノ学習者を温かく迎え入れ、話しやすい雰囲気醸成のために、壁紙や椅子の配置から家族と顔を合わせないように導線に気を配るなど、細部にわたり気を配り、積極的に学習への環境醸成をしていることが明らかになった。しかし他方、実際の教室の開室時間においては、「午前中は指導を行っていない」「日曜祝日は閉室している」など、必ずしも成人が通いやすい状態で運営されてはなかった。

また、学習ニーズの診断、学習目標の設定、学習の場の運営については、回答者の多くが学習者との会話を重要と考え、学習者の意見をもとに指導を行う姿勢をみせてはいたものの、B・F以外は、結果的には学習者の意見を参考程度にしか取り扱ってなかった。こうした部分の最終的判断を下すのは、あくまで指導者のほうであった。また、これらの質問への回答にさいしても、「どうせ大人はこの程度しかできないのだから」「教えてあげても言うことをきかないから」という、上から目線ととらえられかねない言葉もうかがわれた。学習プロセスの評価に関しては、BとF以外は、他の学習プロセスで積極的に行っていた会話を、この項目ではまったく行っていなかった。

【趣味の大人を指導したいか】という質問に対しては、BとFからは「指導したい」という回答

があったが、他の指導者からは、「絶対いやだ」「めんどうくさい」「すすんでやりたくない」というように、成人の指導に消極的な回答が得られた。これは、過去に成人の指導を経験した調査協力者だけではなく、現在成人を指導している者においても同様であった。また、【これからのピアノ教室はどうあるべきだと思うか】という質問に対しては、調査協力者全員が少子化を懸念しており、Eからは、自分の習い事を例にしつつ「技術の向上ではなく、教室が癒しの場でもあるべきだ」という、従来の教室運営とは異なる方向性が示唆された。さらにCからは、「このままではだめだとわかっているけれども、大人のピアノ指導について学ぶ場所がない。どうすればよいのかわからない。自信がない」という回答が得られた。自信のなさについては、G・Hも同様であった。

こうした回答をふまえ、次に、アンドラゴジー論の成人ピアノ教育への適用可能性を探るために、インタビュー・データをノールズのいう5つの考え方の柱にあてはめた。この結果を整理してまとめたものが表6である。

表6 調査協力者の回答とノールズの考え方の関連

①学習者の概念（自己決定性の増大）	
回答	・子どもとくらべて演奏したい曲をはっきり主張する（全員回答）。 ・仕事や家事の合間の時間を意識してつくり、自主的に教室に通う（B）。
②学習者の経験の役割（学習資源としての活用）	
回答	・過去のピアノ学習で身についたクセを治したいが聞き入れてもらえない（A・D・E・H）。 ・成人は経験から得た知識をひけらかすので嫌だ（A・C・G・H）。 ・そのようにピアノを楽しんできた証だから、クセは気にしない（B・F）。 ・成人は経験して納得したものしか練習しない（B）。 ・学習者から新しい知識をもらおうと勉強した気持ちになる（B）。
③学習へのレディネス（生活上の課題や問題から芽生える）	

回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家にピアノがあるから (A・B・D・E)。</li> <li>・仕事を辞めて時間が空いた (B)。</li> <li>・子ども時代に弾けなかった曲に対するリベンジ (A・B・D・E・H)。</li> <li>・今の生活を変えたいから (B・F)。</li> </ul>
④学習への方向づけ (課題・問題領域中心)	
回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人の学習者は基礎教材を嫌がる傾向がある (全員回答)。</li> </ul>
⑤動機づけ (内在的な要因・好奇心)	
回答	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボケ防止 (B・C・D)。</li> <li>・ピアノが上手になりたいから (B・H)。</li> <li>・なぜ習いに来ているのかわからない (A・C・E・H)。</li> <li>・まったく考えたことがない (A・C・D・E・FG)。</li> <li>・本当の動機を知るには時間がかかる (B)。</li> </ul>

## (2) 第二調査の結果

第二調査では、成人の指導に消極的であると回答した調査協力者 (B・F以外) に対して、その理由をさらにくわしく質問した。その結果、「音楽的なことを含めて、学習者に自分以上の知識があると、自分はだめだと思ってしまうから」という学習者の知識に関するカテゴリーと、「大人はこだわりをもっているので、指導者の指示に従わないから」という学習者の過去の経験に関するカテゴリーの、大きく2区分に分類された。これらは言い換えれば、「指導者は、学習者のもつ知識や過去の経験に対して、恐れや不快感をもっている」ということにもなる。

次に第一調査で、「生徒が弾きたいと言う曲の楽譜を、先生が率先してアレンジしたり、手持ちの楽譜を貸したりしている」という回答が多く得られたことをもとに、【学習者のなかには、「先生が勧めてくれた楽譜だから断れない」と思う方もいるかもしれません。よかれと思ってしたことが、学習者の不満につながっている。… そのようにお考えになったことはありませんか?】という質問を投げかけた (この質問の目的は、指導者がどの程度まで学習者の気持ちを把握しているかを探るところにある)。この質問に対しては、Bと

F以外の指導者は全員、とても驚いた様子で、「そのような考えはもっていなかった」「想像もつかない例だ」と回答した。

そこで、本研究の本旨であるアンドラゴジー論を用いた指導例を作成し、実際の指導の流れにそってシミュレーションをしたのち、【学習者の意見を尊重するだけでなく、学習者を援助する。このようなピアノ指導法についてどう思われますか?】と感想をたずねた。その結果、「やっぱり絶対やりたくない」(A)、「私の指導法はまちがっていなかった」(B)、「以前からそのような指導法をしていた」(F)という回答が得られた。また、A・B・F以外の調査協力者からは、「大人を教えてみたいと思った」「長年心に引っかかっていたものが落ちたような気がする」「気持ち楽になった」など、以前とくらべて成人のピアノ教育に対し積極的になるという、目立った回答の変化が現れた。

## 5. 調査結果に対する考察

ここではA・B・Fの発言について考慮すべき点があることを先に述べておきたい。まず、第二調査において成人への指導を「やっぱり絶対やりたくない」と回答したAは、20代未婚であった。このことは、対象となる成人学習者の多くが、自分より年長者であることが予想されることと関連があろう。この点が、成人への指導に消極的であり、なおかつノールズのアンドラゴジー論に則したピアノ指導法を訊いたあとでも、成人への指導についても消極的であった理由ではないかと考えられた。

次に「私の指導はまちがっていなかった」と回答したBは、本人自身がジャズ・ピアニストであり、指導している音楽ジャンルがジャズやポピュラー音楽であるという点で、他の指導者とは異なっていた。また、成人のみを指導していることから、他の調査協力者のように回答の際に、子どもの指導法との相違による葛藤や軋轢が生じないことが考えられる。

最後に、「以前からそのようにしていた」と回答したFは、主な収入源がピアノ・リサイタルであった。このことは、第一調査において、10年

来指導をしてきた成人学習者に対して、「年齢は訊いていないからわからない」と答えたように、自宅教室での成人の指導に寛容的なことにつながるだろうと推測した。多くの自宅ピアノ指導者が、家庭をもち、子どもを対象に主にクラシックピアノを指導することを生業とすることから、A・B・Fは、その指導背景や内容が一般的なピアノ指導者とは異なっており、少数派の自宅ピアノ指導者であると思われた。したがって第二調査の際に得られた、「指導者は、学習者のもつ知識や過去の経験に対して、恐れや不快感をもっている」という調査結果は、ピアノ指導者が成人学習者に対してもつ一般的な感覚だと考えられる。なおこの感覚は、「ピアノ指導者は、学習者よりも豊富な知識をもつべきであり、レッスンを主導的に行うものだ」という感覚をも暗示しているとも受け止められる。これは、ノールズのいうペダゴギー的教師像に相当するだろう。けれども、このように「指導者を絶対的な存在」とみていたピアノ指導者であっても、ノールズのアンドラゴジー論に則したピアノ指導例を示したあとでは、明らかに気持ちの変化がうかがわれた。したがってこれらの結果から、ノールズのアンドラゴジー論の適用の妥当性を垣間見ることができたと解釈された。

## 6. ノールズのアンドラゴジー論のピアノ教育への適用可能性

表6では、調査結果をノールズのアンドラゴジー論の5つの考え方の柱にあてはめ、その適用可能性を探った。その結果、学習者の自己概念、学習へのレディネス、学習への方向づけの3点においては、回答から得られたコメントから、成人へのピアノ指導で、ノールズの論があるていどあてはまると判断した。しかし、学習者の「経験の役割」と学習者の「動機づけ」の2点についてはあてはまらないようであった。そこで以下、あてはまらなると判断したこれら2点について論じる。

### ① 学習者の経験の役割

Bは、学習者のもつ過去のピアノ学習歴を尊重し、学習者の豊富な知識を好意的にとらえていた。

これはノールズがいう、学習者の経験を学習資源として有効に活用しようとする例だといえよう。指導者が学習者の経験を好意的にとらえたほうが、学習の目的や方向性を相談するうえでも効果的だと考えられる。しかし、他の多くのピアノ指導者は前述したように、指導者を「絶対的な」存在としてみているがゆえに、成人学習者が過去のピアノ学習経験から身につけた演奏法を「好まれざるクセ」ととらえ、早期的な修正を望んだり、学習者の豊富な知識を恐れたりすることにつながっていたと考えられる。ここで、こうした学習者の過去の経験に関連するノールズの指摘箇所を引用しておこう<sup>23)</sup>。

経験の豊かさという事実は一方で、ネガティブな効果を生む可能性をもはらんでいる。経験を蓄積するにつれてわれわれは、新しいアイデアや新鮮な感覚、別の考え方に対して自分たちの目を閉ざすようにさせる、精神的習慣やバイアス、先入観を助長させてしまいがちになる。

ノールズはこのように、一方では成人学習者の経験を「資源」だと言いながらも、また一方では学習者の経験のネガティブな面にもはっきりとふれている。ただし調査結果では、実際のピアノ指導においては、「資源」という面で成人ピアノ学習者の経験が活用されることは少なく、どちらかという、指導者はネガティブな面だけを取り上げる傾向にあった。Bのように、学習者の経験を尊重する姿勢での指導が行われれば、学習者の経験は、ノールズのいう「資源」となるだろう。しかし残念ながらそれは稀なケースであろう。またノールズは、引用部分で示したように、経験のネガティブな面への記述はあるけれども、そうしたネガティブな面をもつ経験をポジティブなものへと転化させる具体的なすじみちについては述べていない。このことから、指導者がネガティブな感情をもつ成人の学習者に対してどのような対応をすることが望ましいのかは今後の課題となろう。なお筆者は、すべての指導者がBのように、学習者の過去の経験を尊重することができるようになるならば、成人の経験は確実に学習資

源になるだろうと考える。

## ② 学習への動機づけ

「学習への動機づけ」に関しては、指導者が「おそらくそうであろう」「わからない」と答えるなど、成人ピアノ学習者の学習への動機について把握していない、あるいはしようとはしていないという調査結果が得られた。これではそもそも、学習者の動機を、ノールズの考え方の柱で提示されている「内在的な要因」「好奇心」というカテゴリーに分類することはむずかしいだろう。いうまでもなく、ピアノ学習が長期的・継続的に行われる学習であることから、指導者は、つねに成人学習者の学習動機について、傍観や推察の枠内から出て積極的に把握していく努力が必要であろう。何ゆえに成人が改めてピアノ学習に向き合おうとしているのか、この点への省察が求められているのである。

## ③ 結論

以上のことから、「学習者の経験の役割」「学習への動機づけ」の2点で、ノールズのアンドラゴジー論のピアノ学習への適用がむずかしいことが示された。その理由として本研究では、それはノールズの仮説の真偽ではなく、指導者もつ指導者はこうあるべきだという固定観念と、成人学習者に対する学習者観にあると考えた。ただし、このようにペダゴジー的な意識をもつ指導者においても、ノールズのアンドラゴジー論にもとづいたピアノ指導例を提示した際には、驚きや支持への意向が示された。以上の点をふまえ、成人へのピアノ指導に対するノールズのアンドラゴジー論の適用可能性は、部分的には示されたと考えた。したがって、ピアノ指導者の成人学習に対する意識を変革することができるならば、ノールズのアンドラゴジー論を用いたピアノ指導も可能であろうという暫定的な結論に達した。

しかしこの可能性は、あくまで部分的なものでしかない。というのも、本調査を通じてアンドラゴジー論は、指導者の精神面においてはたしかに適用の可能性がみられたかもしれないが、実際の実践現場ではまだ実践されていないからである。

したがって現時点では「成人のピアノ指導におけるアンドラゴジー論の実践」という今後の課題が示されたといったほうがいいのかもかもしれない。

## おわりに

少子高齢化が進む現在の日本において、子どものみを対象としたピアノ教室の運営はもはやむずかしいものになりつつある。今回の調査研究を通じて、成人学習者に関するインタビューをしたこと、およびノールズの考え方をピアノ指導者に伝えたことで、彼女らの心のなかに、成人学習者を積極的に指導することへのきっかけを生み出せたのかもしれない。しかし、長年子どもを中心に行われてきた音楽教育業界の改革は、まだ時間がかかることが予想される。また、ピアノと他の楽器との成人への指導法を比較しつつピアノという楽器の特殊性を明確にすること、あるいはクラシックピアノとジャズピアノの指導法の差異を明確にすることなど、成人への音楽教育そのものの課題も山積している。さらに、音楽大学における社会人学生の受け入れ態勢の拡大など、教育システムに関する課題も存在するし、また女性指導者が男性や年長のピアノ学習希望者の受け入れるさいのジェンダーやエイジングの問題の理解なども存在する。対応すべき課題は多く残されているのである。

## 注および引用・参考文献

- 1) 梅村充「楽器事業説明会資料：国内音楽教室事業概況（生徒数推移）」2004年、p. 27  
(<http://www.yamaha.co.jp/pdf/cor/ir/eve/pres-040614.pdf>) (2014年9月15日最終検索)。
- 2) ヤマハ音楽振興会編『PSTA 2004年度指導書ハンドブック』2003年、p. 2。
- 3) 三上が2012年3月に、大阪府内在住の個人レッスンのピアノ指導者7名を対象に実施した「大人のピアノについて」に関するフリートーク調査、および同時期に実施した、大阪市内の楽器店講師会に所属するピアノ講師7名への、アンドラゴジーに関するインタビュー調査である。
- 4) ノールズのアンドラゴジー論（訳書）に関しては以下の文献を参照。マルカム・ノールズ『成人教育の現代的実践：ペダゴジーからアンドラゴジーへ』（堀薫

- 夫・三輪建二監訳) 鳳書房、2002年。同『成人学習者とは何か：見過ごされてきた人たち』(堀薫夫・三輪建二監訳) 鳳書房、2013年。同『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド』(渡邊洋子監訳・京都大学SDL研究会訳) 明石書店、2005年。
- 5) 堀薫夫『生涯発達と生涯学習』ミネルヴァ書房、2010年、p. 123。
- 6) Anderson, M. L. & Lindeman, E. C. *Education through Experience*. Workers Education Bureau, 1927. なおエデュアード・リンデマン『成人教育の意味』(堀薫夫訳) 学文社、1996年もアンドラゴジー論生成に大きな影響をおよぼしている。
- 7) 堀薫夫、前掲書、p. 124。
- 8) 三浦清一郎「アメリカの生涯教育」日本生涯教育学会編『生涯学習事典』東京書籍、1990年、pp. 474-478。
- 9) デューイとロジャーズの影響については、マルカム・ノールズ、前掲書(2013年)、pp. 94-98、pp. 105-108を参照。
- 10) ノールズのアンドラゴジー論の柱は、4つから6つまで変化している。本稿では『成人教育の現代的実践』で示された最も一般的な5つの柱にもとづいて論を展開している。この点の詳述は次の文献を参照。Henry, G. W. *Malcolm Shepherd Knowles: A History of his Thought*. Nova Science Publishers, 2011, pp. 185-186。
- 11) マルカム・ノールズ、前掲書(2002年)、p. 513。
- 12) マルカム・ノールズ、前掲書(2013年)、pp. 145-150。
- 13) アンドラゴジー論の実践への適用論としては、例えば以下の文献などがある。Knowles, M. S. & Associates *Andragogy in Action: Applying Modern Principles of Adult Learning*. Jossey-Bass, 1984. 小竹久美子・坪千代子・小坪悦子「看護師リーダー資質養成に関する研究：アンドラゴジーの原理を適用した院内研修の効果検証」『日本看護研究学会雑誌』第32巻第1号、2009年、99-104。阿部和厚・西森敏之・小笠原正明他「北海道大学FDマニュアル」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』第7号、2000年、29-32。堀薫夫「アンドラゴジーと人的能力開発論」日本社会教育学会編『成人の学習』(日本社会教育学会年報第48集) 東洋館出版社、2004年、pp. 19-31。
- 14) 吉田秀文『生涯学習と音楽学習カリキュラム：生涯発達心理学の視点から』音楽之友社、1999年、pp. 408-414。
- 15) 丸林実千代「成人音楽教育学の構想に関する課題：成人音楽学習の『自己決定学習』概念による理論的検討」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究』第3集、音楽之友社、2000年、172-183。
- 16) 川村有美「音楽指導者の専門性に関する一考察：成人教育における指導者を中心に」『音楽教育学研究論集』第5巻、2003年、13-21。
- 17) 石川裕司「成人の音楽学習者の支援に関する一考察」音楽学習研究編集委員会編『音楽学習研究』第5巻、2009年、1-10。
- 18) 丸林実千代『生涯音楽学習入門』音楽之友社、1999年。
- 19) 遠藤三郎『生涯学習ピアノのすすめ：大人のためのピアノ・レッスン』春秋社、1992年、p. 117。
- 20) 大村典子・大崎妙子『大人のピアノ：長続きのコツ』ヤマハミュージックメディア、1997年。
- 21) 元吉ひろみ『シニア世代に教える最高のピアノレッスン法』ヤマハミュージックメディア、2013年。
- 22) 調査では主に「大人」という語を用いたが、本稿ではノールズの論との一貫性などより、「成人」という語を統一して用いている。
- 23) マルカム・ノールズ、前掲書(2013年)、p. 73。

## A Study on the Instruction of Adult Piano Instruction from the Viewpoint of Andragogy

by

Kyoko MIKAMI and Shigeo HORI

This paper aims at applying Malcolm Knowles' idea of "andragogy" to the practice of adult piano instruction. Andragogy is an idea and procedure of helping adults learn, paying special attention to the adult learner characteristics. 5 assumptions and 7 process elements of andragogy were asked to 8 piano instructors with semi-formal interview method. As a result, most of the instructors had little idea of teaching adults, but partially attitudes towards climate setting, self-directedness, readiness and orientation to learning were observed. Yet using adult's experiences as resources of learning and cultivating the motivation to learning were not employed. If these two points will be exploited well, adult piano instruction using the idea of andragogy seems to be realistic.

Keywords: andragogy, Malcolm Knowles, adult piano instruction